

第 35 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

我妻 慧
Wagatsuma Kei

2015年11月5日(木)~7日(土)の3日間、東京都新宿区にあるハイアットリージェンシー東京で第35回日本核医学技術学会総会学術大会(飯田恭人大会長)、第55回日本核医学会学術総会(小泉潔会長)が開催されました。私は就職してから一貫して核医学の臨床業務、精度管理、研究に携わり続けており、年に1回の核医学技術学会・核医学会の3日間を大変楽しみにしています。今大会では初めて核医学技術学会の学術企画委員に推薦していただき、運営側から大会に関わらせていただきました。

会場であるハイアットリージェンシー東京は新宿駅西口から東京都庁方面に10分ほど歩いた所であり、東京都庁の隣にあります。まさしく大都会と言わんばかりの東京都心の真ん中にありますが、会場の隣には緑豊かな新宿中央公園があり、早朝でも木漏れ日の下で散歩や体操をしている方が見かけられ、最終日の土曜日にはフリーマーケットも開催されていました。会場内は一つのフロアに受付、事務局、発表会場、ポスター会場、機器展示会場が揃っており、セッション間の移動もしやすく、まさに東京開催にふさわしいコンパクトかつ機能的な会場設計がされていました。また、会場のメインフロアには核医学技術学会の初の試みである画像コンテストのパネルがあり、日本全国から応募されたアーチファクト画像が展示されていました。診療放射線技師、医師問わず、多くの参加者が足を止める姿がとても印象に残っています。核医学技術の新たな議論の場として、次大会以降も続けていただければと個人的に感じています。

例年に変わらず、会期中は両学会ともに興味深い演題、講演が多く企画されており、聴講したいセッションをリストアップすると、分単位のスケジュール

と身体が二つ必要になってしまいました。また、今回は委員としての仕事もあったため、泣く泣く諦めたセッションがいくつもありました。私が参加できたセッションと司会で関わらせていただいたセッションについて紹介したいと思います。

1日目には、核医学技術学会のもう一つの初の試みとして核医学専門技師と核医学専門技術者を対象とした読影補助講座が開催されました。平日の朝一番のセッションでしたが、300人収容可能な会場がほぼ埋まるほどの参加者がおり、核医学を担当する診療放射線技師の読影補助に関する関心の高さと、多くの方が専門資格を取得しているという意識の高さを改めて感じました。講演は心臓核医学の内容であり、講演者である木曾啓祐先生(国立循環器病研究センター)と竹花一哉先生(関西医科大学)からは心筋血流シンチの負荷や撮像時、血流画像と機能画像作成時の注意点など、私たちが注意すべき点と放射線科と循環器の医師がどのような情報を求めているかを講演していただきました。過密な検査・診療スケジュールでは画像診断医や循環器医師が全ての検査に立ち会うことは困難です。私たち診療放射線技師が主導して検査を進め、画像情報だけでなく検査中の被検者の状態を医師に情報提供することが基本でありながらも重要であるということを再認識いたしました。現在、私は脳神経核医学を専門としているので、同様の企画を脳神経SPECTとPETについても開催していただくことを期待しています。

2日目の午前のシンポジウム「核医学装置の最新技術」では、安藤猛晴先生(東邦大学大橋病院)と大会前から企画し、当日は司会を担当させていただきました。ここ数年の核医学検査装置は驚くべきス

ピードで進歩しています。最新装置、技術が登場した場合にはメーカーは有用性や利便性を強く発信しますが、同時にアーチファクトの発生など新たな問題を孕んでいることも多々あります。これらの問題点を検証し、改善していくことが私たち診療放射線技師の使命の一つであると考えます。そのためには、メーカーからの情報を受け売りにするだけでなく、装置やソフトウェアの基礎となった海外の文献を読むなど自ら情報を取得する必要があります。このセッションでは最新の装置および画像再構成技術を診療や研究で使用されている4名の先生にそれぞれの知見を文献的な考察を交えてお話ししていただきました。半導体 SPECT, 新しい SPECT と PET の画像再構成法, PET/MR とマルチモダリティのセッションだったためか、聴講者もたくさんいました。

同日の午後には、核医学会の特別教育講座として英語プレゼンテーション講座がありました。近年の核医学会と核医学技術学会はアジアやオセアニアなど日本の周辺諸国で核医学に携わる医師および診療放射線技師との学術交流や技術交流を盛んに行っています。核医学会では昨年より日中核医学交流会を大会期間中に開催しています。また2017年の核医学会、核医学技術学会@横浜ではアジアオセアニア核医学会(AOFNMB)との同時開催が予定されています。また、日本は2022年の世界核医学会(WFNMB)のホスト国として立候補し、法被を着た核医学会の先生方が国際学会で積極的に誘致活動をしています。このような背景があるからかわかりませんが、英語プレゼンテーション講座は立ち見をされてまで熱心にメモを取る参加者(私も含まれます)が大勢いました。会場内には若手の方から指導者の年代の方々まで様々いらっしゃったのも印象的でした。講師の島村東世子先生((株)イー・グローブ)はビジネス英会話や研究者の英語プレゼンテーション、それぞれのEメールの書き方などの指導をする会社を経営されています。英語プレゼンテーションを学ぶための書籍は数多く発刊されていますが、書籍だけを読んでも知識としては理解できても、海外との文化の違い、微妙なニュアンス、実際

の立ち振る舞いまでをカバーすることは困難です。島村先生は Non-native English speaker が抱える言語的なハンデと文化的な違いを踏まえたとえでの、英語プレゼンテーションを実演しながら講演してくださいました。また、シチュエーションごとに実際に使える表現も数多く紹介されており、1時間という短い時間の講演でしたが、次の英語プレゼンテーションで実践できそうな表現や所作を持ち帰ることができました。

核医学技術学会の一般演題は昨年の大会よりは少ないものの、117演題が採択されていました。依然としてドパミントランスポータ SPECT の演題数が多く、インパクトのある放射性医薬品、SPECT 検査であるということを確認しました。一般演題の新しいトピックとして、骨 SPECT の定量についてのセッションを挙げます。現在、2社の装置メーカーと1社の薬剤メーカーが骨 SPECT の定量値を算出する装置およびソフトを発表しています。定量値を算出するためには PET と同様にガンマカメラとドーズキャリブレーションとのクロスキャリブレーションが必要になりますが、メーカーごとに手法が異なる点、SPECT のクロスキャリブレーション法が確立されていない点など技術的な問題があるようです。今後、精度管理や撮像条件などの技術的な検討、癌腫の違いや治療効果判定などの臨床的な検討が増加することが予想され、骨定量が熱い分野になる可能性があります。

今回の核医学技術学会はいち参加者ではなく、学術企画委員として運営側から参加であり、シンポジウムの司会担当や紙幅の都合で書くことが出来なかった WG 報告と、まさに初めてづくしの大会となりました。他の委員の先生方にご迷惑をかけた点もあったかもしれませんが、微力ながら大会に貢献ができ、無事に終了したことに安堵しております。私のような若輩者に貴重な機会をいただき、この場をお借りしまして関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

(東京都健康長寿医療センター
研究所神経画像研究チーム)